

特別支援学校（聴覚障害）に在籍する高等部3年生生徒の大学入試に向けた合理的配慮提供の取組 2

1. 事例の概要

特別支援学校（聴覚障害）に在籍するA生徒（高等部3年生）が、合理的配慮の提供を受け大学に合格した事例である。A生徒は大学進学を希望する高等部生徒である。手話を母語としており、大学では英語を専攻したいと考えていた。C大学が個別に設けてくれた授業体験を通して、大学4年間の学びについて考え、より学びたい学部があるD大学へ志望校を変更し合格することができた。

キーワード 大学入試、合理的配慮、評価、聴覚障害

2. 幼児児童生徒の実態

A生徒はB特別支援学校（聴覚障害）の高等部3年生で、普通科に在籍している。幼稚部から特別支援学校（聴覚障害）に在籍しており、人工内耳や補聴器は装用していない。手話を母語としており、発話はない。各教科ともに、学年相応の学習ができており、特に英語を含めた言語や海外に強い興味がある。

3. 本事例に関する基礎的環境整備

- B特別支援学校（聴覚障害）の進路指導として、高1で模擬試験、進路見学、高2で職業適性検査、現場実習などを行っている。また、年に1度、卒業生を囲む会を行い、キャリアについて考える機会を作っている。大学進学希望者できるだけ早い時期からオープンキャンパスに参加するように指導している。校内には各大学の情報保障や受験方法が集約されており、希望する生徒は閲覧することができる。進路面談を年に1回実施している。【基礎2】
- 学級担任を中心にA生徒の個別の教育支援計画と個別の指導計画を作成し、高等部教員全員での共通理解に努めている。年に2回の個別面談、3回の保護者会を実施している。【基礎3】
- 英語の授業では音声認識ソフトを使い、リスニングを行っている。また、やり取りの活動は筆談で行っている。【基礎4】
- 校内には大型ディスプレイや見える校内放送が設置されている。また教室には補聴援助システムが配置されている。【基礎5】
- B特別支援学校（聴覚障害）には聴覚障害のある当事者教員が複数名在籍しており、生徒は聴覚障害者の大学進学について実体験を聞くことができる環境にある。【基礎6】
- B特別支援学校（聴覚障害）は実用英語技能検定の準会場となっており、希望する生徒は合理的配慮を受けながら受験することができる。【基礎7】

4. 合意形成のプロセス

C大学外国語学部で英語を学ぶことを希望し、大学のオープンキャンパスに参加した。C大学内の他の文系学部では聴覚障害者の受け入れ実績がある大学ということで、出願の方向で考えていたところ、大学から連絡があり、通常の講義を体験しないかと連絡があった。聴覚障害があると難し

いとされるスピーキングの授業にノートテイク２名と参加した。英語のテイクは容易ではなく、書記英語での情報保障が間に合わない場面は、カナカナで表し対応していただいた。オンライン英会話の演習は、話すのではなくチャットを使った筆談で実施した。英語科教員と保護者も講義を見学した。授業後に、外国語学部教員から、合理的配慮を行うことで、評価する４技能が変わってしまうことへの懸念が伝えられた。面談での手話通訳は英語科教員が行った。評価の観点から合意形成には至らなかった。後日、本人・保護者と担任・進路担当で面談を行い、C大学への出願は見送ることになった。教員から聴覚障害者の受け入れ実績があり国際色豊かなD大学を紹介した。D大学のオープンキャンパスに参加し、国際関係学部への進学を希望した。D大学での個別相談では、手話通訳があり、円滑にコミュニケーションを取ることができた。その後、受験時の配慮について書面にて申請した。大学合格後にも改めて大学担当者と相談の機会を持ち、入学後に提供可能な情報保障や支援体制について具体的な確認・調整を行い、最終的な合意形成に至った。

5. 合理的配慮の実際

【受験時について】

- 授業体験後に、志望学部の教員と授業内容や具体的な評価について相談した。【合理①－１－１】
- 受験時の配慮として、面接試験での手話通訳を依頼した。【合理①－１－１】
- オープンキャンパス時の受験生向けの体験授業ではなく、実際の学部生の授業を情報保障を含めて体験する機会を得た。【合理①－２－２】
- 聴覚障害のある英語科教員に、英語の授業での情報保障や留学体験についてインタビューさせてもらい、適した情報保障について考える機会をもった。【合理①－２－３】

【入学後について】

- 大学在学中に希望者全員が参加できる海外留学時の情報保障についても、事前相談で大学側と相談した。【合理①－１－１】
- 入学後の情報保障として手話通訳、ノートテイク・パソコンテイク、音声認識ソフトの利用を依頼した。【合理①－１－１】
- 入学後のオリエンテーションにおいて、同じ学部の学生に対し、自身の聞こえの状態について説明する機会を得た。【合理①－２－２】
- 合格後、入学後の情報保障や支援体制について見通しをもてるよう障害学生支援室の教員と面談を行った。【合理②－２】
- 入学後の授業においては、座席の確保を依頼し、情報を把握しやすい位置で学習できるよう配慮した。【合理③－１】

6. 本事例の成果と課題

A生徒は、担任と一緒に、事前課題を準備した。D大学へ第一志望を変更後も大きく落ち込むことなく、出願に向けて準備することができた。事前相談で依頼した手話通訳を介して事前課題に基づいた面接を受けることができた。D大学入学後は情報保障を受けながら、学習を続けている。海外留学時には英語とその国で使用されている手話の通訳者が配置される予定である。